

実践報告書

- 記入日：2024年3月23日
- タイトル：EICTOKYO 実践報告書
- ご所属：埼玉大学教育学部附属小学校
- お氏名：荒川祥輝（あらかわよしき）
- 略歴： 戸田市新曽北小学校5年勤務
蕨市立南小学校2年勤務
現埼玉大学教育学部附属小学校4年目

以下、報告書（写真や図を使用して作成ください）

1. 実践の背景:

- まず、本校勤務藤田教諭より紹介をいただいたのが直接的なきっかけの1つです。昨年度本校で取り組んだものも含め図画工作科でどのようなかわりができ、自分のやりたいことに対して教育的効果をどれくらい高めることができるかを考えた結果、実践に挑戦したいと考えました。

2. 実践の目的:

- 実践を通じて、図画工作科として「表したいことが思い通りに表せる」という楽しさに気付いてほしいと考えました。そこに今回協同させていただいた企業の「Magic Drawing Pad」が活用できると考えました。また本商品の良さとしてペンの性能の高さも子どもたちが興味をもって取り組むことができると考えました。

3. 実践の内容:

- 「Magic Drawing Pad」を活用し、体育科の単元で使用するチームのアイコンを製作しました。

4. 実践の方法:

- まず「Magic Drawing Pad」に触れる時間を設定しました。触れることで製品の良さに気付くことができると考えました。またそこで児童の中から、「もっとこうしたらよいのでは」という新しい発見も生まれました。（写真1）図画工作科の授業では、材に触れる時間をとても大切にしております。タブレット端末も立派な材と考えるとこういう時間の中で

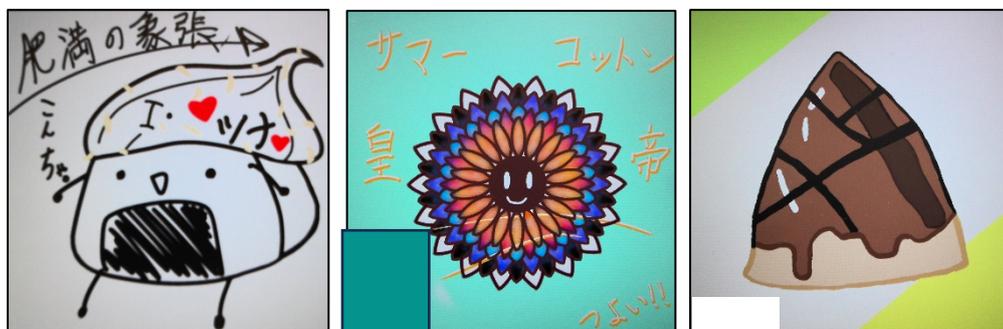


写真1 端末に触れる時

題材の方向性も左右する発見が生まれてくると感じました。触れる時間が終わったらチームで話し合ったアイコンの製作に向かいます。(写真2) タブレット端末の数に限りがあるので、チームで話し合いながら形や色を考えていきました。考えていく中で普段の鉛筆や筆ではできない、細かい部分の着色ができることに気づき、そのことを踏まえて製作を進めていました。特にたけのこを描いているチームでは、たけのこが照っているようにするために、描いたたけのこを拡大し、陰影をつけたり、白を複数用意し光の加減を調整したりしていました。普段の図画工作の授業では見られない貴重な姿であったと思います。



写真2 アイコンを考えながら描く



5. 実践の結果:

- 実践を通じて、感じたことはやはりタブレット端末で絵を描くということはとても新鮮でかつ思い通りに描けるノンストレスな部分が子どもたちに一番いい影響を及ぼしたと考えます。子どもたちは今でも休みにタブレット端末で絵を描いてそれを見せ合っています。まだまだ「こんな機能があったから試したらこんな絵が描けたよ」と見せてくれます。可能性の広がりを感じるとともに、タブレット端末での図画工作。未来の姿を想像することができました。

6. 実践の課題:

- タブレット端末で描くということは、ゆくゆくは一人一台というのが理想ではあったと感じます。ここまでの品質で一人一台はとても現実的ではないと感じる一方で、これさえあればいつでも好きな時に絵を描いてそれを保存、みんなと共有できる。ということが可能です。紙ではできないすぐにやめることもできるという部分も含めるとこの台数という課題は切っても切れないものであると感じます。

7. 今後の展望:

- 今後は、このタブレット端末で描いたものが動いたり、巨大化したり、逆にミニチュアみたいに小さく持ち運べたり…絵からどんどん広がっていくような活動が進められるかと考えました。